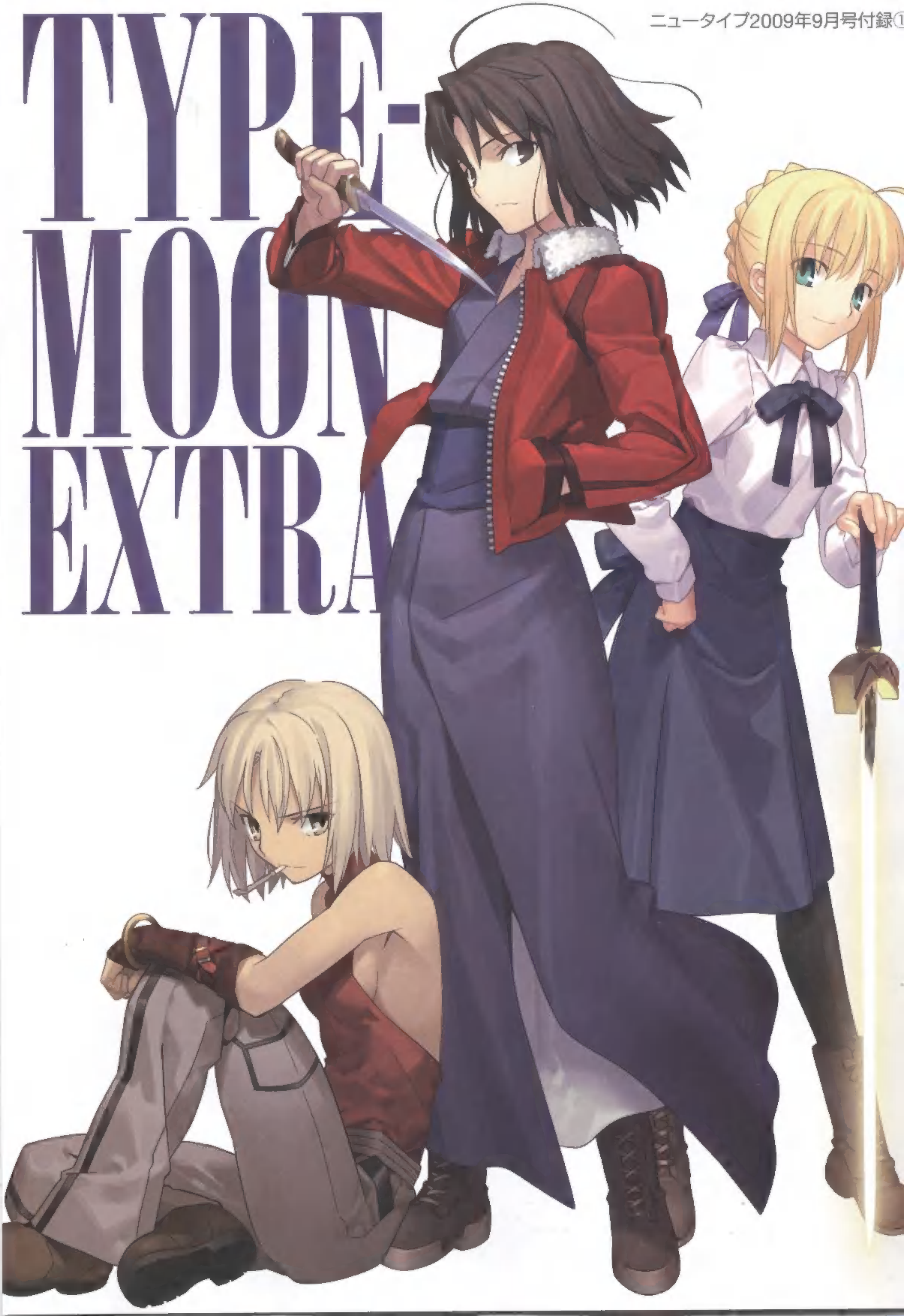
ニュータイプ2009年9月号付録①

TYPE-MOON EXTRA



消えた境界

衝撃の全七章、完全映画化発表から3年……ついに最終章を迎え、ひとつの作品となった劇場版「空の境界」。すべての境界が消え、そこにあるものとは？

「式」としての日々

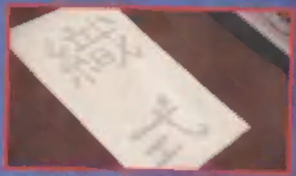
幼いころから、由緒正しい「両儀」家の跡取りとして異能を認められ、育てられた少女は、いつしか「普通」をあきらめた。ゆえに誰も寄せつけず、心を開かず、淡々と自身の内とだけ向き合う日々を過ごすばかりの人生と決めていた——そんな折、ひとりの同級生と出会う。名前は黒桐幹也。まるで、どこぞの詩人のような名字の彼はことあるごとに彼女にかかわり、語りかける。式の内に在る、もうひとりの「織」の存在も、抱える闇も、抑えきれない衝動も知らず。

己の気持ちがわからない。揺れているのは、変化の兆し。変わってしまう自身が怖くて、黒桐と離れようと決意した刹那、抑えていた感情があふれ出す。けれど少女はその感情の名前を知らぬまま、深い深い眠りに堕ちる。

折しも街では連続通り魔事件が発生していたけれど、その事件と彼女と彼の関係が明かされるには、これよりさらに4年もの後のこと。そして目覚めた式は「ひとり」だった。

己の内に衝動を抱え ひとり生きる少女

「両儀」の名の示すとおり、代々、二重に人格をもつ者が生まれる血筋を引く彼女はやはり、自身の内にもうひとりの「織」と名づけられた存在を意識しながら暮らしていた。



女性人格の式と男性人格の織。この2人がひとつの体[illegible]なる。[illegible]、織は黒桐に告白する



何[illegible]と彼女につきまとう黒桐幹也。うとまし[illegible]から[illegible]いつしか[illegible]そこに穏やかな[illegible]を[illegible]



自身を持て余し、夜にさまようことを日課としていた彼女はある晩、血だまりのなか、たたずんでいた



ときに黒桐の勤め先である伽藍の堂に、黒桐を待ちながら入り浸る。自分の居場所を見つけたのだろうか



黒桐の妹、鮮花は兄とかかわる式の存在を快く思わない。けれど、実は式は鮮花をにくからず思っていた



空の境界 第七章 殺人考察（後）

●テアトル新宿ほかにて公開中
WEB ► http://www.karanokyoukai.com/

illustrated by MASARU KIMURA
finished by MIKAKO SENZAKI
background by YUKA SANETAKE
digitalworks by ufotable
text by YOHKO OOCHI



失われた「織」

かつて、彼女は「2人」だった。常に自身とともにある、もうひとりの人格「織」がいて、どんな感情も分け合っていた。だから、こんなにも不安に陥ることなんてなかった。

以前は違っていた。彼女の内に「織」が存在した当時。同じように生きてきた彼と彼女はすべてを共有し、分かち合い……けれど。

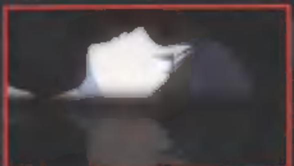
「織」が式よりも、衝動を抱えていた分だけ「普通」にあこがれ、だからこそ黒桐幹也に会い、式の、そして自分の夢のために消えることを選択し——残された式は、生まれて初めて「ひとり」きりで「孤独」に触れる。

それは、とてつもない危うさであり、頼りなさであり、はかなさであり、同時に己の思うがまま歩んでもいい、という自由でもあり、自由ゆえの喜びと怖さであり、後ろめたさであり。

4年前の連続殺人事件に関係する白純里緒の手に落ちた刹那。甦る過去の日々——式の心は「自分が自分として生きるコト」同時に「絶対に永遠に大切に思うヒト」を知る。

式の内に眠る少年はただ静かに夢を見る

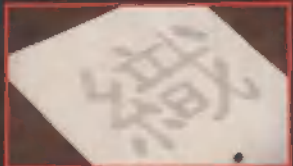
ある日、黒桐の手元に残された、手紙。それはかたくなだけれど、妙に心惹かれる同級生の両儀式からの、実に意外なデートの誘い……渡したのは、もうひとりの人格の「織」だった。



ずっと夢を見ていたくて、みずから消えることを選んだ織は抱える闇をすべて背負い、ひとり逝く



式とは異なり、くったくなく笑い話す織のことばを、黒桐は戸惑いながらもひとりの人間として受け入れる



織は式の意思に反し「黒桐と話してみたい」と願い、己の存在とその内に巣くう衝動を明かし話しつづける

2006・12・29映画化発表から2009・8・8第七章公開日まで
1318日の戦い

映像化発表から始まった、長い「空の境界」との戦いの日々。最終章を飾る"監督・瀧沢進介"に約3年半を振り返ってもらった

「指針や、作品に対する手加減が手探りだった、一章」あおきえい

——ついに最終章公開ですが、その前にufotable代表でもある近藤光プロデューサーとともに各監督に当時を振り返っていただきます。

あおき 大げさでなく、この作品で自分の演出人生が変わった気がしていて、とても感謝しています。

近藤 いちばん最初で、プレッシャーも強くてシンドかったけど本当に頑張ったよね。

野中 僕の手がけた二章のほうが実は先に動いていたんだけど、あの一章があったおかげでかなり助かりました。

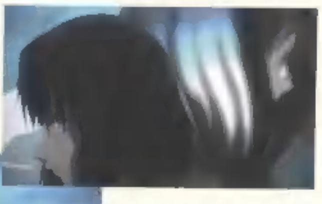
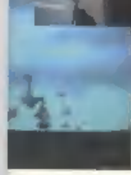
近藤 HDの登場とデジタル撮影の進化という、タイミングがちょうど重なった時期だったんだと思います。僕の知ってる数年前のDLP上映よりはるかに画面は鮮明で、衝撃を受けました。結果、ソニーPCLの試写室に何度も映像の確認で足を運ぶこととなりました。そういう映像面としても、全七章公開という上映方法としても、他にも色々と新しい試

1 俯瞰風景

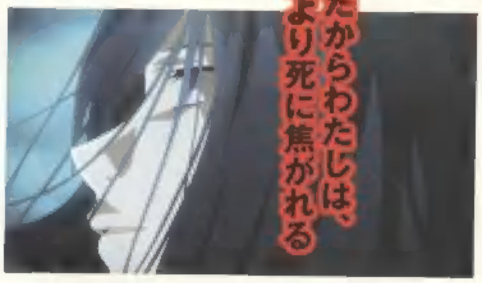
監督:あおきえい

1998年9月。街では少女たちの不可解な飛び降り自殺が繰り返されていた。彼女たちの関係は不明、動機も不明。しかし、それこそが共通点だと指摘する者が。それは工房「伽藍の堂」のオーナー蒼崎橙子だった

だからわたしは、生より死に焦がれる

人知れず少女たちを死に誘うのは、空に焦がれ、飛ぶことを望んだ、巫条霧絵。彼女は病室から外を眺めつづけるうちにいつしか、飛ぶ器を手に入れたと静かにほほえむ



2 殺人考察(前)

監督:野中卓也

1995年春。黒桐幹也は同級生の両儀式に心惹かれ、わずかながらもその関係を育んでいた。そして夏。街では人知れず、連続殺人事件が起こっていた。己をもて余し夜ごと外をさ迷う式を思い、黒桐はある決意を固める

なんて幸福な男




殺人事件が続く日々、抱える闇をもて余し毎夜、そぞろ歩く式は犯人なのだろうか。その無実を信じ、身を案じて黒桐は深夜、彼女の家の前にたたずむ。そんなある夜、血にぬれた彼女の姿を見つける

着物姿で登校し、他者を寄せつけず、ただ、凛とそこにいる少女の姿に黒桐はいつしか、思いを寄せる

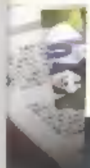


3 痛覚残留

監督:小船井 充

1998年7月。雨の夜に出会った少女。行方不明になった友人の後輩。まるで四肢をねじ切られたかのような変死体。頼みごとがあると連絡をよこした妹。勤め先に舞い込んだ人捜し——。はたして、それらの関係は?

こうしてやっと わたしは人並みになれる



黒桐が雨の夜に助けた少女は、妹・鮮花の同級生だった。彼女の名は浅上藤乃。その出自を追う黒桐は、彼女が「痛覚をもたない」体だと知る。そのころ藤乃は初めての「痛み」に打ち震えていた





みをやってもらっていてこの作品のクオリティを保ちつづけてもらっています。

小船井 でもね、自分には監督も作画監督も向いていないと改めて思いました。ただ、そのことは三章をやってみてわかったことで、そういう意味では今回、監督ができたことは感謝しています。でも、もうやらない(笑)。

近藤 皆さん、三章は喜んでくれているみたいですよ。

小船井 もちろん全力を尽くしたので、そう言ってもらえるのはうれしいことだし、よかったと思うんだけど、他者の評価と自分の評価は別だから。ただ、いろいろ描けたことはいい経験でした。

「改めてファンの顔が見えた作品だった劇場版『空の境界』」平尾隆之

近藤 今日はいませんが、四章を手

Who is 瀧沢進介 第七章 殺人考察(後)監督

たきざわ しんすけ

あおきえい
野中卓也
小船井充
平尾隆之
近藤光

第七章を制作するに当たり、主なコンテ作業をした、あおき、野中、小船井、平尾、近藤の5人の集合ネーム。プロデューサーの近藤いわく、「"瀧沢進介"という名前に特に意味はありません」とのことだが……?

TYPE-MOON
武内崇＆奈須きのこのナイショ話
その3



――第1話をご覧になった武内さんが「エンディングは俺の嫁」とおっしゃったとか？

奈須　そう言える若さは羨ましい(苦笑)。武内くんは、キャラクターをプロデュースする立場ではありますが、その原動力はキャラへの愛情なんだと思います。このヒロインを愛でてあげたい。かわいく見せてあげたい。という思いにあふれている。

武内　そう言ってくれるとうれしいんだけど、最近は少し違っていて自分の中に「かわいい」というベクトルが少ないゆえのことです。式は基本的に男前で、女性らしい面といっても「きれいではかない」という方面に寄ってしまいます。劇場版空の境界を見て、「もっとかわいく描かないと」と思い知った身としては、「CANAAN」のヒロインたちも、もっとかわいく見せる方法があるんじゃないか？と考えてしまう訳です。そんなことを考えていたときに、あのエンディングを見せていただいて……安藤監督さすがだ！と（笑）。

――そのヒロインたちは、どんなふうに生まれたのでしょう。

奈須　ゲームソフト「428～封鎖された渋谷で～」当時、カナンの設定は「中東出身」「天才的ハッカー」の2つと、チュンソフトさんからのオーダーとして「戦う少女」から、自由に膨らませていただきました。

武内　カナンのデザインに関してはチュンソフトさんからのオーダーも明確だったこともあり、すぐにシルエットが固まりました。迷わず、むしろ直感的に形にするほうがうまくいくことが多い気がします。

奈須　カナンの絵が上がってきたときに「ああ、この子を動かしたい」とパワーを分けてもらいました。でも「また金髪？」とツッコミも入れました(笑)。

武内　どちらかというと白髪だけどね(笑)。配色は実写パートとの親和性もあるのでけっこう悩みました。

奈須　きっと、いまだにウーア・ウイルスが体内に残っていて、そのせいだよ！と(笑)。

武内　困ったときの、ウイルス頼み(笑)。

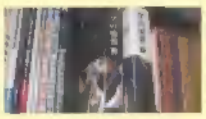
奈須　ナノマシンだ。ＳＦ物の免罪符、ナノマシンと同義なのだ……。

武内　まあ、とにかく方向性は固まったので、あとのキャラはカナンとのバランスを考えて決め込んでいきました。ただ、アルファルドに関しては……。デザインが実写パートにいちばん引き摺られたキャラだったので、アニメを見たときにちょっと地味には感じちゃいましたね。

奈須　その分マリアがかわいいから許す。

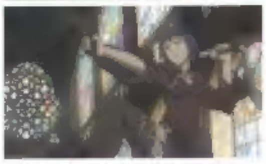
武内　そうなんだよね。TYPE-MOON的には珍しい、ひたすらかわゆく描いていいという。昨今の僕にとっては貴重な存在です。

奈須　琥珀（『月姫』の）並にな！



書棚にはもちろん同人版「空の境界」が。講談社ノベルスさながらの装幀が当時、大きな話題になった





リャン・チーはＢＢ弾の入った玩具の銃で人をいたぶる。その残酷さが彼女の心の闇をかいま見せる



リャン・チー

「姉さまは、私のすべて」。アルファルドの無敵の美しさに命をささげる忠実なしもべ。アルファルドを狂わす宿敵カナンを憎悪する



表向きはダイダラ社の社長のカミングズを裏では足蹴にする。カミングズもまんざらではなさそう。おかしな関係

Keyword.4

蛇

表向きは国際軍事会社ダイダラ社。しかし、その裏ではウーア・ウイルスを開発し、世界中を混乱に陥れようとする犯罪組織。各国首脳が集まる対テロ国際会議でウィルスを散布し、その狂気を世界に知らしめた。





シャムから受け継いだ蛇の刺青。それはカナンも同様。今もなおシャムの残したことばとともにアルファルドの肉体に刻まれている



アルファルド

「カナンは――お前や、俺とは違う」シャムの残したことばが彼女に何を残したのか？　犯罪組織「蛇」を動かし世界にテロを仕掛けようと暗躍している



Keyword.5

対テロ国際安全協力会議

上海で行なわれた「対テロ国際安全協力会議」。各国の首脳が集まり、テロに対抗する国際間のネットワークづくりなどが議題とされた。アルファルドは、そこでウーア・ウイルステロをついに実行する！



アルファルドの狙い。それは各国首脳を一か所に集めること。ついに彼女は大規模テロを仕掛ける！



リャン・ピー

かわいいけれど残酷で毒舌。ウーア・ウイルスのテロで大混乱に陥ったテロ会議の会場モニターに現れた３Ｄキャラ。その正体はもちろんリャン・チー！



「み～んな、み～んな死んじゃうぞ☆」。かわいい３Ｄキャラに似合わぬ残酷さ、華麗極毒雷天使降臨！





会場でアルファルドと再会するカナン。２人は憎しみという底なしの闇の中で対峙する。「私と同じところにまでわざわざ堕ちてきてくださった」。憎しみに満ちた瞳のカナンを見て、アルファルドはほくそえむ。自分がかつて味わった闇の世界。そこにカナンも堕ちたことに悦びを感じていた



チャイナドレスでアルファルドは対テロ国際会議のパーティへ参加する。のんきな各国の首脳たちは、そのセクシーな肢体に目を奪われる。誰もこのあとに繰り広げられる惨劇を予想した者はいなかった

ターにしようと思って、とにかく語らないキャラクターとして脚本を書きました。作画のピーエーワークスさんの力量を信じて、表情やしぐさで見せています」

しのぎを削る、２人の戦い。その戦いの果てには何が生まれるのか。

「しっかりと戦いを描くことができれば、ある種の〝愛〟は生まれていくんだろうなと。やっぱり肉弾戦ですからね(笑)。その愛がどんな形を取るかを、楽しみにしていただければと思います」

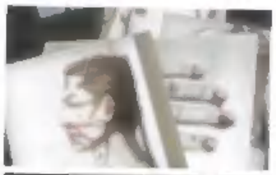
豪華なスタッフが参加する本作だが、その熱意は格別だという。

「カナンとアルファルドが本当に不器用な子だから(笑)。彼女たちをフォローしてあげるように、各スタッフが熱心にコンテを描き、演出をして、絵をつくり上げているんです。声優さんの演技も、音づくりもすべてが熱い。私も、インパクトと色気がある奈須（きのこ）さんのせりふに拮抗できるよう、頭を悩ませつつも書いています。それぞれのスタッフの愛を感じていただければ！」

Keyword.1

ウーア・ウイルス

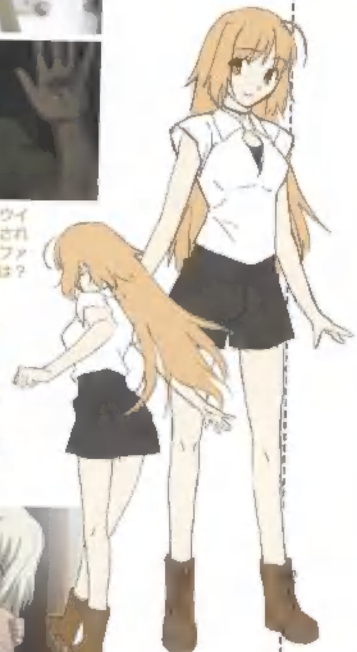
アルファルドたちの属する「蛇」が所持している大量殺人ウイルス。咳や血液とともにウイルスをまき散らし、空気感染する。感染から12時間で発症し、死亡。数年前から、中東や中国各地で散布実験された。



ウーア・ウイルスで生き残った者の体組織には劇的な変異が起こる。中には、人ならざる能力を手に入れた者も



中東で、渋谷でウーア・ウイルスの実証実験が繰り返される。その側には必ずアルファルドがいた。彼女の目的は？



大沢マリア

カナンを普通の女の子だと信じている旧友。三流ゴシップ誌のカメラマンとして上海に来る。カナンの憎しみを知り、その埋められない距離に悩む





かつて大沢マリアは渋谷でウーア・ウイルスのテロに巻き込まれていた。だが、当時の記憶を失ってしまう……

Keyword.2

共感覚

太陽は青色——それは憎しみの色。青のオーラを探せば、必ず敵がいる。五感を同時に機能させ、感情を色覚化する「共感覚者」。色を〝視る〟ことは、カナンが戦場で生き残るための唯一の手段だった。





共感覚が発動すると栗色だったカナンの目は深紅に光る。感情を殺した「鉄の闘争代理人」へ変貌する



カナンにとって「銀」は愛すべきもの。なぜなら色がないから。戦闘中、カナンは冷徹に災いを呼ぶ色を消していく



カナン

ふだんは、何事にも無関心な女の子。しかし、ひとたび「共感覚」を使うと、余計な感情を殺し、戦闘マシンのように動く

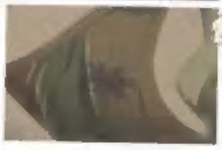
Keyword.3

ボナー

ウーア・ウイルスの実験体となり、生き延びたものを〝ボナー〟と呼ぶ。何らかの特殊能力を手に入れたいわゆる、カナン予備軍。反面、実験の失敗体はアンブルームと呼ばれている。







毛細血管から皮膚に浮かぶ模様。それはウーア・ウイルス被験者のあかし。[illegible]の変異痕



ハッコー

サンタナが経営するあやしげなカラオケ&コスプレバーで働いている謎の女性。彼女もウーア・ウイルスの被験者だったが……





[illegible]の屋台や中華料理店などで働く、謎のアルバイター。その正体は『蛇』に利用される暗殺者。彼女もまたウーア・ウイルスの被験者のひとりだった

ユンユン

少女たちの〝戦い〟

武内崇の描くヒロインたちのデザインと、一触即発、殺し合う2人の少女を描く岡田麿里が語る、〝少女たちの戦い〟。そしてその行方

●カナンとアルファルド その異質さと不器用さ

『最初は安藤真裕監督と制作会社ピーエーワークスの堀川憲司社長から『女の子の話を書いてほしい』とオファーされたんです。ガチバトルタイプの話で、萌えに偏らない『女の子の感情を描く』のは意外で。意欲的に作品づくりをしようとしている気持ちが伝わってきました」

これまで、「true tears」や「とらドラ！」など、女の子のナイーブな心情描写を得意とするシナリオライター岡田麿里。戦うヒロインが登場する本作をどのようにとらえたのだろうか。

「カナンとアルファルドは、葛藤を表に出さないヒロインたち。普通は葛藤をドラマの中心として書くものなんですけど、彼女たちは普通の人間とは違う傷つき方をして、違う悩みを抱えている。そこがおもしろいなと思ったんです。3人目のヒロインの大沢マリアの心情の動きをアニメ的にしっかりと書くことで、2人の異質さと、そして1周回ったところでの『女の子』としての魅力が描ければと考えました」

そんな異質なカナンとアルファルドの心情を書くときにキーワードになったことばは——。

「最初に、カナン役の沢城みゆきさんに『カナンってどういう子なんですか？』と聞かれて。そのときに、とっさに『赤ちゃんのような子』と答えたんです。本当はもっといろいろ考えていることがあったのに、なぜそう答えたかが自分でもよくわからないのですが(笑)。一方、アルファルドは実体がつかめないキャラク



アルファルド

犯罪組織「蛇」の実質上のボス。[illegible]することで無敵となる。己の欲望のままに生き、シャムまでをも倒す。数年後、上海に舞台を移し、ウーア・ウイルス[illegible]

各地で、大量殺戮ウイルスの実験を重ねていく。ウーア・ウイルスの実験を重ねていく。ウーア……それはスワヒリ語で「花」と「死」を意味することば。感染者は約12時間で、骨と骨格筋以外のあらゆる場所から出血し、死亡する。副作用として体内の組織を変化させ、人間をモンスターにつくり変えてしまうこともできるという。

「アルファルド。お前は無敵だ。だが、もし、目的ではなく、個人としての欲望をもったのなら――」

シャムのことばがアルファルドの脳裏に思い出される。

いったい、アルファルドはこのウーア・ウイルスを使って、何を仕掛けようとしているのか。やがて世界の[illegible]へ物語は、突き進む。



一人目の少女

今までの生活と、本来の名前を捨て、助けられた青年・シャムから「カナン」という名前をもらった。それは、"約束の地"という希望を意味する名前だった……

——「カナン」それは約束の地……。

希望という名の呪縛

アルファルドの左腕には蛇のイレズミが入っている。これはシャムやカナンの腕に入っているものと同じ。彼女もまたシャムによって鍛えあげられた兵士だった。彼女は育ての親のシャムを討つことで、その呪縛から解き放たれようとした。

絶望を旅する

絶望の果てにたどりつく2人だけの戦いの地

光と影、鉄と蛇、希望と絶望。感覚を視覚する者・カナンと、感情を排する者・アルファルド。シャムに育てられ、無敵の戦闘技術を身に付けた、姉と妹の2人が相克する。

「銃はシンプルだ。引き金を引けば決着がつく。人間同士の複雑さはない……」

カナンが抱える、アルファルドに対する復讐。アルファルドがもつ、世界に対する制裁。単なる情念を超えた、相手の存在を根絶するための戦い。それは中東の地で始まり、東京・渋谷、そして——決戦の舞台はアジアの魔都・上海へと続く。決してぬぐいさることのできない死の匂いを体にまとい、2人は死地を求めて、世界の各地をめぐる。

それは絶望の旅。

その旅の中で、アルファルドと彼女が率いる犯罪組織「蛇」は世界の



絶望のすえの出会い

数年前、ウーア・ウイルスの実験を防ぐためにシャムは中東のある村へ潜入する。阻止に失敗し、絶望するシャム。家族を失い、絶望する少女。シャムと少女は運命に導かれるように出会い、ともに生きていった。

シャム

かつて中東でカナンを助けた傭兵。引き受けた任務を完遂する卓越した兵士として裏社会で知られていた。カナンに自分のもちうるすべての戦闘技術を託し、アルファルドの凶弾に倒れる

――お前はきょうから「カナン」だ……。

二人目の少女

シャムが育てたもうひとりのカナン。異端の能力をもつ少女。シャムはその力を差別せず、ありのままで許容する。少女は蛇のイレズミを入れ、シャムと生きる覚悟を見せた

希望の地を求め

CANAAN

TV

毎週／土　夜10.30-11.00 TOKYO MX

●その他の放送局はP.133を参照

WEB ► http://www.[illegible]

Illustrated by [illegible]
colored by [illegible]
[illegible] by NAOMI NAKANO([illegible]
special effect by SUMIE MURAKAMI
background [illegible]
text by HIDEKUNI SHIDA

光を失ったカナンの過去　その名に込められた思い

すべてを失った少女は闇の中に光を求める。戦いに疲れた兵士は少女の中に希望を見いだす。

運命の始まりは、数年前に中東で起きた惨劇だった。ある村で大量破壊兵器ウーア・ウイルスのプロトタイプの散布実験が秘密裏に行なわれたのだ。

次々と奪われる命。失われる過去。閉ざされた未来。幾多の死があふれる村の中で、かろうじてひとつの命が救われる。家族を失い、感覚をねじ曲げられたひとりの少女。彼女を助けたのは、歴戦の傭兵シャムだった。シャムは少女に名前を授ける。その名は「カナン」――「約束の地」。それは希望を意味することば。

ゲーム「428～封鎖された渋谷で～」の中でTYPE-MOONが手がけたボーナスシナリオでは、何もかも失ったカナンが、シャムによって生きる術を身に付けていく物語が描かれた。カナンにとって、シャムは師であり、父であり、あこがれの人。だが、その安息の日々は、宿敵アルファルドによって唐突に終わりを告げる。そのときからカナンの無間地獄のような日々が始まった。

「いいか、カナン。憎しみには決して、憎しみで対抗してはならない」

何度も繰り返されたシャムの残したことばが、カナンに届いたのかどうか。家族とシャムの愛――2つの光を失ったカナンはただひたすらにアルファルドを追う。はたしてカナンのたどり着く先は?

約束された希望の地をめざす、鉄の闘争代行人となった少女の修羅の旅が幕を開ける。



カナン

鉄の闘争代行人。「蛇」の天敵。シュガースティックをかむクセをもつ。ウーア・ウイルスの実験に巻き込まれ、ことばを形として、音をにおいとして感じる「共感覚」が特徴

劇場版 Fate／stay night Unlimited Blade Works

●劇場用完全新作 …
サンシャイン池袋ほかにて …
Fate／stay night …
…税込2940円

Illustrated by ASAKO NISHIDA

Produced by STUDIO DEEN

STAFF 原作＝TYPE-MOON

戦いに挑むは、7人のマスターと彼らに召還された7騎のサーヴァント
命果てるまで戦うと契約した魔術師と使い魔がめざすものは、
どんな願いをもかなえるという"聖杯"
その力を巡り争う聖なる殺し合い――聖杯戦争が今、幕を開ける
かくして戦いの舞台となる冬木市に再び災厄が訪れた。生き残るのは、ただひと組

聖杯を巡る戦い―

TVシリーズからふり返るキャラクターたち



アーチャー

凛と契約する弓兵のサーヴァント。召還時のミスで過去の記憶が不完全のままだが、その戦闘力には微塵も曇りはない。凛に負けず劣らずの、皮肉屋

ライダー

騎兵のサーヴァント。高校に結界を張り士郎たちを襲うが、そのマスターは士郎にとって意外な人物だった





間桐桜

士郎の家で食事などの世話を焼く、士郎と凛の高校の後輩。妹のような存在だが、ひそかに士郎に思いを寄せている

イリヤ





宮士郎

夜、サーヴァント同士の戦いを目撃して
戦争に巻き込まれてしまう。
、ごく普通の高校生だが、偶然に「セイ
」と契約する

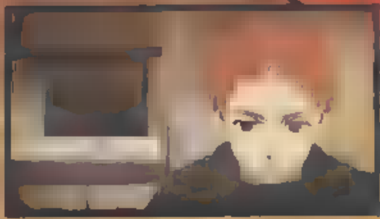
Message from

'04年の原作ゲームに始まり、'06年のTVアニメを経て、今回、完全新作で劇場というステージを与えていただけたのもひとえに皆様の応援のおかげと心から感謝しております。スタッフ一同鋭意制作中の「アンリミテッドブレイドワークス」にご期待下さい。

プロデューサー　小倉充俊



境界式

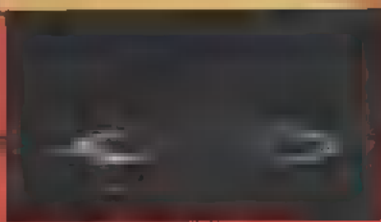


かつて自身の在った場所を失われ「[illegible]」に飢えていた、[illegible]は己の価値を問う





静かに雪がつもる1995年3月のとある夜。黒桐幹也は初めてシキと出会う



ナイショ話

その2

——映画化発表当時から「[illegible]祭り騒ぎにする」と掲げていましたが、いかがでしたか？

奈須　お祭りになったと思います。むしろ、僕らがみこしを担ぐ側になろうぜ！と実に8年ぶりに個人サークルとしてコミケに[illegible]もしましたし。

武内　[illegible]いつものように巻き込みました(笑)。ただ、[illegible]れ[illegible]自分たちができる、一番の祭りだったと思います。

——何より「未来福[illegible]」を読むことができたことがうれしかったかと。

奈須　僕は逆に。一度は完結した物語の先を書けたことにお礼を言いたい。[illegible]のでかかわったすべての人に[illegible]していますが、ことにアニプレックスの岩上（敦宏）プロデューサーに一番の感謝をささげます。よくぞ、こんなに個性的な人たちを最後までまとめてくださったと……縁の下[illegible]力持ちです。

——お[illegible]人にとっての「空[illegible]境界」とは何でしょう？

奈須　当時、[illegible]的にも時代的にも書きたかった[illegible]で、ちょっと背伸びしてみようと挑戦してみたら、あれ、そのまま行けちゃった？みたいな作品です。

武内　その[illegible]は、この小説を境に今の奈[illegible]こがで[illegible]上がった気がします。あえて言うなら「[illegible]換期」というべき作品です。

視えるモノ 視えざるモノ

『空の境界』という[illegible]を見つづけた、岩下敦宏プロデューサーの3年間とは？

空の境界



もうひとつの[illegible]を与えられた、巫条霧絵は「飛ぶこと」を願い、少女たちを誘う



痛みを感じる術をもたない浅上藤乃は、[illegible]「痛み」を初めて知る

[illegible]

んだけど。ちょっとうまくいかなかった。何を突っ張り棒にして、まとめるかが見つかってなかったんですね。何を残して、何を削ぎ落とすかばかりに意識がいって、枚数も相当オーバーしていた。それで、シナリオを書き直すところから始めて、突っ張り棒が決まったあとでもここだけは変わらない、外せない、という箇所をピックアップ。そのシーンから野中さんにコンテインしてもらった。

野中 だから、軸となるものが無いまま始めたので、描いても描いてもボツになってつらかった（笑）。

近藤 僕自身は軸をつくるの集中してとにかく前に進める。五章が終わったところで平尾君、六章の作業途中くらいで小船井さんにもそういう形でそれぞれパートでコンテをもってもらった。2人が得意とするものはわかっているつもりなので、そういうシーンを割り振りました。ものすごく良いものが上がってきたので、これはもう一切変えず。

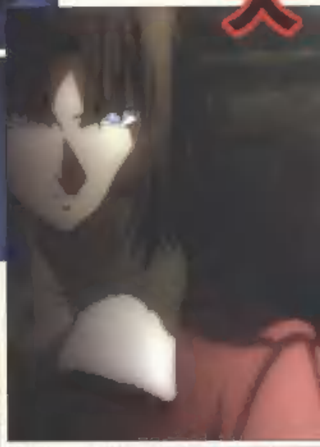
小船井 自分的にはまだ納得がいっていなくて……何というか、もっと



それは織という名の、もうひとりの自分が最期まで大切な人に伝えられなかったことば。同時に黒桐幹也という夢の形を誰よりも壊したくなかった、願い。だからこそ、その思いを胸に刻み、式は決意する



人殺しはいけないこと。その黒桐のことばを守り、あえて傷つけられるままの式。しかし彼の命を奪った白純里緒を許すことはできなかった

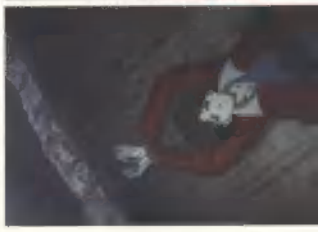




1999年3月。春まだ早い坂道を寄り添う2つの影が行く。それは互いを必要とし、普通に生きていくことを願った、式と黒桐の姿。人を殺してしまった彼女、その罪を背負うと決めた彼の未来への扉が開く……



手錠で両腕をつながれ、とらわれの身となった式は、吐き捨てるように里緒を罵倒する。しかし、それは彼をあおることにしかならず……かくして彼は彼女を手に入れるため、彼女が大切に思う黒桐を手にかける



というあの見せ方には思わず唸りました。式は何者にも汚すことができない存在であるということが伝わって、すごくよかった。

平尾 まとめて任せてもらえたから、ああいう形にできたんだと思うので、そこは感謝しています。

――そして、ついに最終章公開を迎えるわけですが改めて今の思いを。

あおき 僕は七章に関しては、本当にお手伝いという感じなので今から見るのを楽しみにしています。

野中 応援していただけたからこそ、ここまで辿り着くことができました。ありがとうございます。

小船井 もう、感謝しかありません。

平尾 最後の章です。これで一区切りなので、見てください。

近藤 公開前からずっと「お祭り」にしたいと言っていましたが、お祭りって自分たちだけじゃできなくて、参加してくれるファンの方々がいてこそだと思うので、最後までいっしょに祭りで騒げたら幸せです。

――劇場版「空の境界」七章のお祭りを楽しみたいと思います。ありがとうございました！

TYPE-MOON
武内崇＆奈須きのこのナイショ話
その1





――第七章で。やはり気になるのは平尾（隆之）監督渾身のとらわれた式と里緒の場面がありますが……。

奈須 正直言って迷いました。家でひとりで見るのならいざ知らず、多くの人がいる劇場で見るものなので。扇情的なシーンがあることで気まずくなったり、そんな些細なことで作品に集中できなくはならないかと。反面、個人的な感覚として見せ場のひとつには違いない、という思いもありで。僕個人としてはプラスマイナスゼロだったので、武内くんのせいにするつもりはないけれど（笑）判断を任せることにしました。

武内 このシーンをどう思うか相談されたので、すなおに「俺は見たいけど」と答えただけですけどね（笑）。ただ、ああいうシーンを喜ばない人たちがいるんじゃないかという心配はありました。

奈須 ですね。けれど、とらわれた人間を描いているんですから、罪悪感はあって然るべきです。サービスというより必然なんですよね、あれは。



TYPE-MOONの会議室に鎮座ましましているのは、守り神（？）のネコアルク。思わず合掌してしまう……

――この対談時点で初試写はまだですが、アフレコに立ち会って、いかがでしたか？

奈須 原作だと、クールな式とひとりで盛り上がっている里緒という図なんだけど、あの絵コンテで坂本真綾さんと保志総一朗さんが演じると……もう、これ以上は言えないっ。

武内 毎回試写を楽しみにしているんですが、今回は楽しみなんだけど怖くもあります。

奈須 いや、僕がこんなコトを言うのはなんなんだけど、式って女性なんだ、と改めて感じました。かっこういい、男前な、中性的な少女というシルエットでしたが、今回は女性的です。あ、いや、今回も、かな？

――そして、今回でついに前代未聞の全七章映画化が完結、終わります。

奈須 終わるんですかねー……。

武内 あんまり終わるっていう実感がないですね。初めから、この企画は「劇場版というお祭りにする」というのがテーマのひとつだったんですが、だんだんとその期間が長くなっていって、いつの間にかこのお祭りの日々には終わりなんか来ないんじゃないかって錯覚してしまったのかもしれません。

奈須 まあ、僕らの中では2001年に一度、鬼籍に入った作品ではありますから。

武内 だからこそ改めて思うのは、全体を通じてこれほど幸せなメディアミックスにはもう出会えないかも？ということです。

1300カットの結末

「空の境界」という長い〝お祭り〟を締めくくる、第七章。延べ1300枚（OP&ED含まず）にも及ぶカットを経て、物語は終焉を迎える

「七章絵コンテは、描いても描いてもボツになってつらかった（笑）」
野中卓也

——七章を手がけた瀧沢進介監督について、うかがいます。これは？

近藤　アニプレックス岩上さんから何か名前をつけろ、と指令がくだったので（笑）。七章は最終的にみんなでよってたかってつくってるんでそれでいいんじゃないかな。

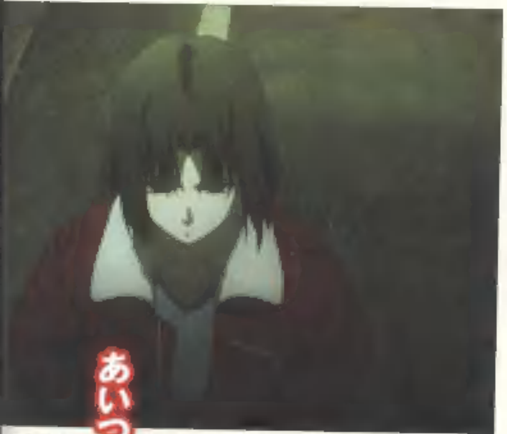
——なぜ、そんなことに？

近藤　話すとそれはそれは長いことになるので（笑）。詳しくは、劇場用のパンフレットに出ることになってるらしいんだけど、形式上は、僕と絵コンテもしくは演出に参加しているスタッフということになっています。ここにいる人たちですね。でも、そんなことはみんなどうでもよくて、いい作品になるよう自分の役割の中でベストを尽くす。そのことに専念していると思います。

——どのように作業を進めていったのでしょうか。

近藤　シナリオを固めるまでに時間がかかっていたんですよ。まず、平松正樹くんが第0稿を上げてくれた

7 殺人考察（後）
監督：瀧沢進介

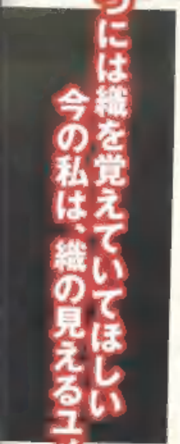




人は一生にひとり分の死しか背負えない

それは、かつて自身と同じく、2つの人格をもつ祖父が遺したことば。でも、だからこそ「人を殺してはいけない」という当たり前のことに惑う

絶対って何？ オレにわからないコトがどうしてお前にはわかるんだ、コクトー!!



あいつには織を覚えていてほしい　今の私は、織の見えるユメだから

自分の内に確かにいたはずだった。けれど今はどこにもいない織。その存在に改めて思いをはせる式は、変わってしまった己に問う。それは、おそらくとてつもないほど繰り返されていたであろう、葛藤。決して殺人が好きなのではなく殺人しか知らなかった織。あるいは殺人に焦がれる式——はたして殺人を嗜好していたのは織なのか、式なのか？









静かに語る黒桐に対し、いらだちを隠せない式。わかっていないのではなく、わかっているからこそ、2人の距離は遠く。互いを思いやるほどに彼女は叫ぶしか術をもたず、彼はただことばを紡ぐことしかできない——

はみ出したいという欲求があって。

近藤　でも、あのアクションは間違いなく前半の見どころです。

「小船井さん、平尾君のパートは一切、直していません！」
近藤光

——そして奈須きのこさん、武内崇さんのお2人も驚愕したという（笑）里緒と式の絵コンテについてうかがいます！

近藤　ここはどう考えても平尾くんが担当すべきパートでしょ（笑）。

平尾　それは、どうかわかりませんが（笑）、最初から、ここをやってほしい、という話でした。

近藤　小船井さん同様、平尾君のパートに関しても一か所も直してません!!

平尾　ただ、任されたときはこれが全体の中でどれくらいの割合を占めるのかわからなくて迷いました。なので、考えてもしかたないと思ってこの場面だけで完結するように描いていったんです。

近藤　里緒に唾液まみれにされて、それが式の熱によって蒸発していく

みがあって、本当にドキドキでした。きっと、うちのみんなも同じ気持ちだったと思うんですよね。

あおき だから、終了時の客席の拍手と、奈須きのこさんに握手を求めてくださった、あれは本当にうれしかった。

――式の魔眼やバトルがどんなふうに演出されるのかも楽しみでした。

あおき あれはみんなでつくり上げたという感じです。いろいろ相談に乗ってもらって、あの形になりました。

野中 最初は僕もいっしょに考えていたんだけど、実は二章には魔眼が登場しない……と気づき（笑）。

近藤 でも「織」が居たじゃない。

野中 居ましたねえ……というか、あまりにも前すぎて、大変だったことしか覚えていません……一度は終わったはずなのに、まさか今になって、七章で「空の境界」に再会するとは思いませんでしたよ（一同笑）。

近藤 いろいろ巻き込んじゃってるもんね。今はことし立ち上げた徳島のufotable新スタジオに行ってもらっているし、第七章にも入ってもらっている。野中さんにはいちばん最初から参加してもらっているので、思えばずいぶん長い旅になりました。

> 「三章の監督ができたことは感謝。でももう、監督はやらないよ（笑）」
> **小船井充**

近藤 三章の小船井さんには監督以外に二章、四章以外の全部にかかわ

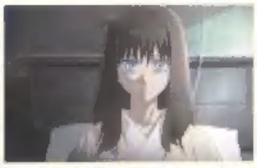
4 伽藍の洞

監督:滝口禎一

1998年6月。2年もの昏睡状態から目覚めた式は視界に映る異変に気づく。それは万物の死を視るという「直死の魔眼」だった。同時に「織」の存在の消滅にも気づく。孤独と失意に陥る彼女は生きる意志を放棄する



力をもつ極上の器である、彼女の体を求める「器を持たぬモノ」を前に、初めて式は自分の意志で「生きる」ことを覚悟する



望まぬまま、異形の力を得た式は、そんな自身の有り様を疎む。しかしカウンセラーと称して訪れた橙子は、その力を使う術を教えると言う。けれど自暴自棄な式は……





5 矛盾螺旋

監督:平尾隆之

1998年10月。式は臙条巴と名のる少年を助ける。両親を殺した、と告げる彼は、ある日、街で殺したはずの母親の姿を見つける。混乱する巴に「確かめにいこう」と語る式。しかし2人を待ち受けていたものは……





巴が家族と暮らしていたマンションは、橙子のかつての学友にして魔術師の荒耶宗蓮が、式を捕らえるために建てた相克の螺旋だった





両親を殺した記憶は本物なのか？　己の居場所について、家族について、惑う巴。一方で荒耶に続き橙子を憎むかつての学友、コルネリウス・アルバが人知れず街を闊歩する



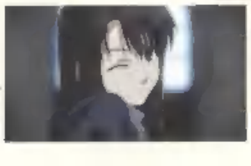
6 忘却録音

監督:三浦貴博

1999年1月。黒桐の妹・鮮花の通う礼園女学院で不可解な妖精事件が発生。早速、橙子の後輩にして魔術師見習いの弟子である彼女は、妖精を視る力をもつ、しかし恋敵でもある式をしぶしぶ連れて調査に乗りだす

学園で教鞭を執るのは黒桐と似たたたずまいの玄霧皐月。その彼を苦手とするのは、実の兄に心惹かれるという禁忌に焦がれる、鮮花。そして事態は急変、今、彼女の反撃（!?）が始まる





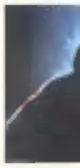


学園内を非公式に捜査する、鮮花と式を人知れず見つめているのは生徒会長で先輩の黄路美沙夜――その思惑を知る者は、ただひとり











がけた滝口禎一監督にはただただ感謝の気持ちだけです。

――五章ではアイキャッチが入ったりと、いろいろな試みが……。

近藤 原作ファンで最初から五章監督に手を挙げていただけあって、力の入った、実に平尾君らしい絵コンテでした。何よりおもしろかったし。その辺、どうですか？

平尾 自分としては、この作品でいろいろ試みることができた、ということも大きいんですが、何よりファンの方のためにつくる、ということを実感したいい機会でした。もちろん考えていないわけではなかったけど、改めてファンの顔が見えたというか……。

野中 書店で映画を見てくれた人から声をかけられたんでしょう（笑）。

平尾 ああっ、そんなこともありました！（笑）びっくりしました。

――すてきなお話です。そして六章の三浦貴博監督も残念ながら、本日はいらっしゃいません。

近藤 今、かつてない鬼気迫る状況で後半の大変なことになっている黒桐を描いてくれてます（笑）。

――六章は黒桐鮮花だけでなく、瀬尾静音や浅上藤乃といったヒロイン大集合の章でもありました。

近藤 六章は所々に彼らしいチャーミングな芝居が見られて楽しかった。

――駆け足で六章まで振り返っていただきましたが、ここまでたどり着いて、改めていかがですか？

近藤 まだまだ（インタビュー時点で）七章が終わってないので、とてもまだ振り返る余裕は……。ただただ7本の映画をつくりあげるということがここまで大変だとは。予想以上でした。

Newtype
THE MOVING PICTURES MAGAZINE

表紙
illustrated by TAKASHI TAKEUCHI
colored by SIDZUKI MORII
裏表紙
illustrated by TAKASHI TAKEUCHI
colored by TAKAO AOTUKI

Printed in Japan
Designed by ZEN

TYPE-MOON EXTRA

たいぷむーん えくすとら



こんてんつ